

## 水土里レポート 投稿様式

投稿月日	令和元年11月8日
タイトル	「スイゲンゼニタナゴ」シンポジウム
水土里レポーター名	水土里ネット福山 佐々田 愛

令和元年10月13日（日）福山市内のまなびの館ローズコムにおいて「第69回魚類自然史研究会関連シンポジウム スイゲンゼニタナゴの過去・現在・未来 ～芦田川の魚の保全にむけて～」が開催されました。

会場には小さな子どもから大人まで老若男女約90人が集まり会場は熱気に包まれました。

スイゲンゼニタナゴは、最も絶滅の心配が高いため『種の保存法』で国内希少野生動植物種に選定され、許可のないまま「捕獲・飼育・販売・放流」することは厳しく禁止されている貴重な魚です。国内では岡山県と広島県に生息しており、広島県では芦田川水系にのみ生息が確認されています。

この小さな魚を守るため岡山大学大学院中田准教授を会長に有識者や地域、広島県・福山市の行政関係課など様々な分野の関係機関が集まり「芦田川水系スイゲンゼニタナゴ保全地域協議会」が発足しました。水土里ネット福山も管理する「芦田川用水」にスイゲンゼニタナゴが生息していることから協議会の一員として保全活動に協力しています。

シンポジウムの開会挨拶で保全協議会の中田会長から「福山でスイゲンゼニタナゴのシンポジウムを開催することが悲願であった。」と話され、スイゲンゼニタナゴがイシガイへ産卵する貴重な映像を見せていただきました。



基調講演では「身近な淡水魚の歴史を未来につなげる一何を守るのか」「遺伝情報から探るスイゲンゼニタナゴの過去」の2題が発表されました。全することの難しさとして、安易な放流は自然破壊となることや保全のために飼育することがペット化となり自然では繁殖できなくなるなどを興味深く聞きました。また遺伝子解析によって分類することが可能であることやスイゲンゼニタナゴは、5万年前に激減した時期があると推測できることなど遺伝情報からしか得られない情報をお聞きしました。

続いて話題提供として「スイゲンゼニタナゴに関する環境省の取り組み」「ミヤコタナゴの保全における現状と課題」「淡水魚の保全に関わる様々な連携」が発表され、実際の取組状況をお聞きしました。

その中で「保全は地域の課題の一つでしかなく地域の住民や農業者など様々な課題の中で保全を組み込んでいけるような活動が必要」「保全の成功は世界でも約1割しかない。成功例のコピーではなくその地域に根差した独自の取り組みをしなければ成功しない。」という話が印象的でした。福山では野生のスイゲンゼニタナゴが絶滅寸前にまで減少しており、逼迫した状況の中で何をすべきか考えさせられました。



続いてパネルディスカッション「スイゲンゼニタナゴの保全、地域の淡水魚の保全にむけて」では、スイゲンゼニタナゴの保全活動をされており、岡山県から参加されたパネリストの三人から岡山のスイゲンゼニタナゴ保全の取り組みをお聞きしました。

岡山県では河川も多く用水路などの水路網が張り巡らされているため福山に比べるとスイゲンゼニタナゴが多く生息していたが近年減少してきたことや河川改修工事を全面改修ではなく片面ずつ改修するよう行政などと連携していることをお聞きしました。また、スイゲンゼニタナゴがいなくなった原因として河川改修工事の施工方法が問題だが、それと同じ程度に密漁（違法採集）による乱獲の影響が大きいと話されました。

保全をするためには、広く一般市民にも呼び掛ける必要があるが過去には他県から来て密漁された事例があり、これからの活動をどうするか難しいと思いました。小学生のころから正しい保全の方法を教えること「伝える」ではなく「伝わる」ことが大切だと言われました。

また、直前に関東・東北地方に上陸した台風19号の影響を心配しておられました。岡山県では平成30年西日本豪雨災害でスイゲンゼニタナゴが生息していた河川が氾濫し、壊滅的な状況になっているそうです。水害がある度に洪水による河川の荒廃と災害後に治水工事で多くの生き物の生息場所が失われることを危惧しておられました。

参加者から「岡山県・広島県で条例を定めて密漁を厳しく規制できないか」「産卵母貝の養殖や人工的に導入することは可能か」といった具体的な意見があり、専門的で有意義なシンポジウムとなりました。

シンポジウムに参加して、スイゲンゼニタナゴだけ保全するのではなく、そこに生息する様々な生物が共に共存する環境を保全することが大切だと改めて感じました。

水土里ネット福山ではスイゲンゼニタナゴの保全を通じて、農業用水路の健全な維持管理や用水の安定確保とともに水辺環境の保全に努め、農業用水路の役割と重要性を発信してまいります。